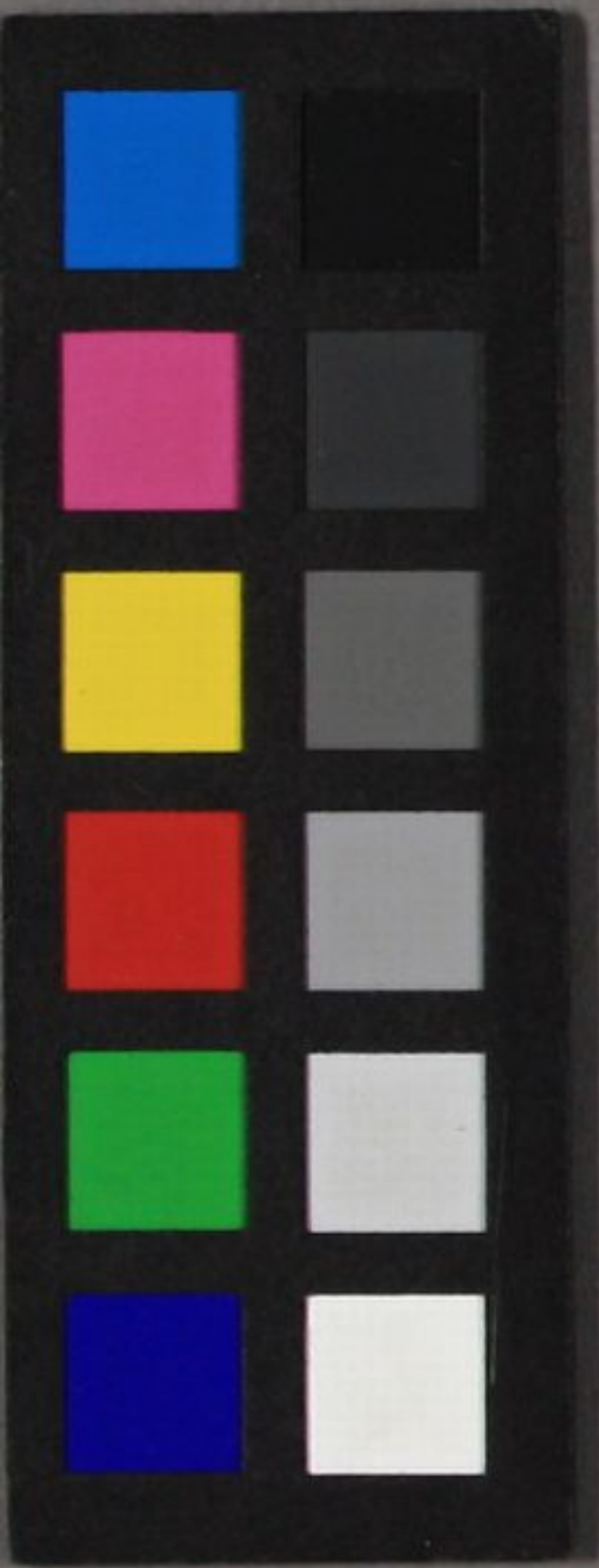


芭蕉翁句解大成 冬

中村俊定文庫
文庫 18
829
5



精校索引

冬之部

雨 一ヨリ四マテ 三八 五三 六三ヨリ 六八テ 小雲 四
 冬一字 四 六八 冬月 四 鷓鴣 五 風 五 六 九
 尾花 五 六 十四 六八 冬枯 七 八 九 七 土 枯尾花 九
 菖蒲 十ヨリ 十三マテ 冬菊 十三 十四 氷 三 七
 口切 燻衣 十四 十五 山今遠 十五 庄取裁 十六
 大根 十八 十九 蛭子遠 十九 冬菜 白眞
 冬牡丹 二十 中サ 二十ヨリ 二十三マテ 六十七 紙傘 二十三
 紙子 二十三 六十八 夜着 二十三 沖送 二十三
 冬籠 二十三ヨリ 二十五マテ 六十七 六十八 雪 二十五 五十三
 鴨 二十五 千鳥 二十五 二十六 六十九 初雪 六十九 雁 二十六



囊 二七〇 三三六 六十九 火桶 三十一 三十二 烟火 三十二

巨燧 三十一 七十 田燧 七十一 火神 三十三 炭 三十三

改巾 三十三 三十三 三十五 三十七 河豚 水仙 三十六

生海嵐 三七 雪 三十八 三十九 四十八 三十一 雪田 三十一

霰 四十八 四十九 五十一 于鉉 四十九 神敵 五十六 五十七

麥 五十二 五十三 五十四 實入 五十三

煤拂 五十三 五十四 臘梅 中梅 實梅 五十六

苦杏仁 厄拂 五十七 ウハラ 空 餅梅 五十七 六十七

餅 餅花 五十一 年忘 五十七 五十八 茶花 六十一

空菊 五十一 年布 五十八 紫苔 五十八 五十九

新 六十一 六十二 六十三

芭蕉翁句解参考

月院社何丸著

此とくは芭蕉翁の孫や孫の孫と小石川と
愚考延宝元年の吟さうりむうしと孫川と
書ふみ小石川とありきとあつたは此
作あり神日記より貞享二年の初上死せ
半より非さう貞享元年の妻とさう正丸傳を
きよよ唱ふと死句の風よありきと事
小説の年よもふくくかゝる俄士の翁乃白
本とりあつたふとりやちとくは上の上ま
ちり初句の口癖よも貞享元年福の正丸

とくはいよそかーかていよるなり寛文延
宝天和のまぬの申よも中川しん風よ今よ
白のたよきよもあつたは風よの申よも
風よ白よと白よもあつたは風よの申よも
此考合してあきよもへ
此中よ中よ大に遊玩村志とく説
ちりしとく説神よは川桂川
いつの時雨笠をよよさしては雨よ借
しよとくは雨よ笠松よ著目くりり
余申よあつたは雨よよとて
いよしとくは我よとくはあつたは
以上いよる古調をさうしよとくは我よと

すゝも非し

相葉張をさうりか〜海が穴

志は〜こころま〜むせ〜ほらに

六張海に草鞋は押毛並時雨

草鞋おし〜こころおのち

草ま〜時雨もさうりか〜大後〜舞〜解す

時雨りや船の帆端よる〜

魚考船乃船先ま〜り〜もあ〜んれ

うそ〜飛〜志〜り

或人のもと〜けめて〜

さうりか〜初〜我時雨が

古郷〜旅を〜あ〜る

を出るに

か〜や〜か〜へ〜と〜

お〜ら〜れ〜を〜さ〜

袖をが〜し〜きて〜

あ〜る〜旅人

旅人と我名を〜初時雨

松芦よ〜時雨も〜葉毎葉

一尾根を〜し〜不二の雪

一本一尾根とす〜非なり

見え〜通〜る〜

旅情の志〜の〜

七十五

宿しよ人をも我さう初時く水
まよひや我もの影もしる時雨

小倉山

さくさくやうかばるるあなまの影もしる

一書は西山定家卿に贈るの書に思ふも

伊賀の山越

初走くはれ猿も小藁をほりけし

七部大後よき

人しを時雨を宿も空も空くとも

——くくくく田の雨の楳のまをむす

能外ら海よき

白巻三

ゆき木張庭にいさめし時雨は
結糸も葉井の人よりかゆなれ影も枝
の影のほよふくまてきく

十月三日詩六亭

ふささうり人し年よ初時雨

石も重て香炉をぬす時雨は

右詩の一句「樹下石上拾香花」より出た

山城へ井も影かゝるさくさく

島田氏塚本氏の家よき

宿かアアアをさすの影もしる

宿かアアアをさすの影もしる

りねる影

ふるさとは走る——時るの大井川
大井川をたかかたけもふるさとし大井川に
あるは学作あり

新暮余の心節てたやき時雨止
月の鏡小春よるや目守一月

古瀬より月の鏡は鏡もちと見きりて
吟うよくたつねも目守月とるふか
あやうら鏡よふうのうた

さくみりやふるさとはなみかた
あやうら鏡よる尾の三石の鏡を
さくみりやふるさとはなみかた

夏考後撰「日く——のまのいそたきこ
けし秋乃文とまよきりてくりのけり
うの月の細きまはまのほそまは合す

中内一枝新よ
せよ白へ梅ふ一枝のこそさきめ
松原の小やねをりりや年若さる

母の影留のま書やう新留をなめる
さうまをさう白あをん次やうけりよし松原
死後よくの白さるへ山もまよし流は
石古屋へ入流みふ風吹す

狂句木枯のやと中みよ似たふ
大部大流よま

舟の画賛

舟やたけりかこきて志つちりぬ

公石云新古今「竹」張たにふきあゆ

夕暮のまゆあをゆも秋もさうき

木柵や頬膝いひむ人死都

三河玉新城東中巻沼

程ちろ宅とて

京に倦てあゆ舟やあむ住居

三石没楽郡巻沼新八石居七千石交代出寄

合元さう

英の玉耕 古き

木かきしよ白りやけりかづり

松楓葉とゆりあちの屋しちよ

彼大根の糸の糸の糸あききと先より

藤しよんて葉とゆのむと伝守気修し

風すよ

大かきしよ山吹突る形す

一書よ杜詩よ「兩行秦樹直萬点蜀山尖

一書よ木子蔓湯の詩よ華山嶽寒愈峻

夏芳風すよ累池よ云蒼白事本池よ云椎古

天白土十年之竹園司言寸本國相生山よ相樹

あり沖代り樹すて中交四十九丈園三十

九尋西の枝三千尺矣予の樓むけ交八咫余

尾の交まき交全才と名金巻すて記紫紙

光あつた一尾一茎十二の傍法と成す是風風
さう興る文徳をぬむ天子神皇の記をひき
き儒佛の傍法弘ちよまをむむ村松のう
ろり甲上佛像ありたる是サホサ瑞瑞光如
来とさう又利所他人甲山よ入七本移りくち
一本伐てサホサ日光月光十二の傍法四天主の
そ傍法一カこれの彫刻しよふ上よ安ん
やう煙炭山風とさうさうは是の風を
傍の傍法とさうさうは是の風を
傍八百石天名子以ぬお高取松とさうハ
川よの傍法とさうさうは是の風を
さうは是の上の傍法とさうは是の風を

傍せらるやうむ

めろ松やせらるむろよ風の音

めろ松の磯よけさるさうさう

急考和名抄は新^カ冠^カ葉と考又急考松葉と考
鶏のトサカと似る色形がねをかくりよ
如へ

枯ららや作弱々嶽の松年

急考作弱さう大和は属寸作弱さうすへ
て和歌よ詠するさうさうは急考と考一と考
急の本と考急考して急考急考松葉と
急考急考の急考よ急考急考急考急考急考
急考急考急考急考急考急考急考急考急考

すむく福系山も鞍了山もくへき
を生理の正しきりあかく下りむ

おれらの律室を訪ひて
花皆枯て露をたらし中の子
石潤て水志ありや冬もが

強行

つくつくと家を鑑みたる枯れが
馬あつくつく我を後したる枯れが
愚考翁の句もつる半がうく画又入るうく
るあつくくの方成下是再案の同吟は
法本よる世外として友部よ出せると大

非なりなる日帰きくして家系を鑑みたる
是案あきの宮とより晋書三行晏粉白不志等
行歩自顧影又後赤雲然よお露既降木葉
を脱人影在地作見たる法の傍に似れを
抄出して友部のやうひをうやせよといひ
情といひけりきといひは画法は寸馬豆人と
種あつらひる試は枯れを伴て涙をたふす
下次のすくみ切やの句もあきし

樊田よ訪ふつ社从大に破れ案

地もよふれて羨まかき

垣衣よ枯て候かよやう

愚考 樊田と大社神領七百石とや奈神日本

さびしき身く雪の枯尾をたづねてまじくあはれ
せぬよく考へて雨あふ雪と明を遣
わてんそも明くはむさうあうあうの時らと
もかろもたづねて雪の増かふるまてをまじ
死をささくはといふ句意はあましく知る

骨はあやかしくとらるるよふま標の處
掃りむや茶を風の秋ともあはれて

九らせの暮秋を市中は信院
て居を伊川のふとらるるは移す
長安も古来名刹の地有る
まじく金幣のさものまじり路
絶いとえけむ人のかこ

見ええ侍るるまじりのごや
まじりや

は東の戸よ茶を木葉かくあはれ
愚考の仔細ありありて掃下は九ヶ年うろト
居ありて天和年中伊川へ移住の時の時
あり長安古来名刹地空手無金幣路難
の涙をまじりとえけむ人のかこ

神を月の初つづる月の涙と
ゆきえらるる明照寺に旅の心を
流して

まじり候や流てまじりあはれ
愚考けむの腕よまじり由と有る遍照寺の傍

うと受んやめつる

三尺の山も嵐の本のそりぬ

愚考 鶴林玉露曰伊尹の墓もて荒石脚三尺
黄壇直棘遠又許渾の白一四尺孤墳何処是
又孔子封其母墳崇四尺を是をありあり
必能その墳墓そののつぎるへりれともた
かぎられといふゆゑをたうり 今一義あり
山もさうある貴かたの樹あるを以て貴しと
いふ流より三尺の山やれともたあれた本
の墓もさうといふ意味もある然りければ
よらるとんんんん

ひさかた 甲斐の流をや田子の浦

愚考 甲斐の川上る位流境教来により甲斐
西より余同出る河を流河の境を富士川
といふ甲斐凡三十里とゆふを甲斐川を
一日も流れ止まるる必定て流る流河と
河の流のふけれを玉の名とせると
多度指況をさる

まふ人よ我れをちるせ流る川

一書よまの人も智もたう徳もたう功もあ
るもたう流る知るふれつ徳を
かへるもたうあへるもたう徳を
失の境よ流るこれを
胡蝶云宮司は對してかたうすよ流るを

かきしきも志るしむふや大海京も持ちて高き
ととらもちしむしれとのる意なり

鏡古録に云市本なる家名とあり河本も多
度権現をさるとして安養宗女をさるとして
ありてはる名とあり極喜ハ世よ志るる者
なり後者もれもさる名をさるせなりといふ
名すをさるふありむやた。わとの字換
ぬ

悪者よ人よ汝う名をさるせとさるる
世活言なりよ人の流すなりすまいけを
より下知するといふやういふは色蕉と
名のる所野の流る川とせりかきよ家名

ともちしせといふむと一むら妙能す
かきしき癡素をいふ族のありて着のうよ底
をさるる事。世に飛怪かきし

再考も多度権現といつこもあはけれとも
是とも野州素名那の吟なり高き川と
いふ川の名なりて今く高きれなり
川もあはるるを近世の能士は高き川
よすて高き山高き田なりとありぬ新
名目とて高き片版りてなりともなり
又それと高きりて高き高き高き山
なりとて高き高き高き高き高き山
みさるる高き高き高き高き高き山

不食のけしきを産の爲に
是も又由の任持せる存す

花露の長男の志をいへる

山家集の歌に教ふ

一 家も六のさぬ菊に氷うな

續猿蓑に解るる

元禄癸酉の卯の九日素堂

菊園の拾ひの宴を神

正月のふはすの結る

もはるるをいへる

もはやる菊を花時別を

陽といへるをよるに展

幸陽のこゝろに

あゝ秋を移秋葉を詠

て人くをすめられ

菊の香や産すれはる産の産

愚考法集子辛酉の初をと出せり

ははる産に續猿蓑に要し

氣を産く時即幸陽の事

曰東坡云炭菊候不常菊花開時即重陽

涼天任月即中秋不須以日月為別也十月初

吉菊始開乃与客作重九次和陶九月九日詩

云一展重陽の例と塙檢校云天曆の序代

九月と延壽帝の由忘日はあはらせ

あつて九月の宴をどつめ十月は秋菊の
宴はつれづれをひかへて十月は秋菊の
展守陽の例の半続さるゝも出す 昔の
の事と王弘の方より履を造り送り又履
あき履をえささる例又双中を履て返す
海すの秋は負あけてかそふへては皆兵
陶別つて侍なり

時物のまゝ子の儀や海 七

古調の句々皆かく謎のみ多し 時物も別
小豆なり 餅もか萩といふをそれをも本
とす

口切やたし内儀と 小豆

口切 内室内方 簾中 漸巻 小の方 女房
後遠 石 房守 木等 その陰より影をたす
たしなる字のまき自然なり けり又古調く

支梁亭 口切

口切 口切 口切 口切 口切

一書と云場と利休の産土といひては作
紹臨回條の地あり 海あり 産は泉
木のる外といふ 字紙の句と利休感あ
りて山家地とてその類まで作られり
然れど原川のあ地も海あり 名えて場
の産は似るそなへり 口切とがなり
口切とがなり 口切とがなり 口切とがなり

兼務以伐弓... 由今律中のやうなる外

一書より日蓮上人の報書より... 蓮花經と廻向... 日蓮の由今律

日蓮上人... 父より三玉氏貞... 善名善日丸と号す

の書つた... といふ又蓮花と... 志言字より入徳字... なる光院

よ入南都... 法を破三昧... の業因とて... 此後より室内

とて大悟しはた八日の朝日よ白ひきり
合はせ南無妙法蓮華經と教すし編唱し一宗
宗を奉ふ乃ふ弘安六年十月十三日寂乎後
醍醐帝勅して大菩薩の号を賜ふ葬る共
身延心と云々

水滸し律んえりり 西取紙

愚考一向宗門流字津吉宗字ホの字名阿
西取紙と云ふ教書西取人十月二十八日寂乎時
修しするを教書西取とも云ふは律中
多を唱て又すて西取風と云ふそれを門徒の
流を宗とす十月よ西取紙て修するあり
西取紙と云ふ

津吉宗字親重西取人津父皇太后宮大進
有範卿少母と八幡太師義家公の嫡男村馬
ち義親の少息女とて吉光女とす有範卿々
天津見を根するの少苗裔大藏冠の末孫とす
母云のるる金糸のるる宮に中に入とて懐妊
一則誕生ありて松尾系とす西取と云ふ
古石をみて佛像乃の堂をいともむと云
中うさびあとのみりあしとくや有為持意を
とひついで、今考を記す西取又右有範々を
薨しむひぬれを頻し西母云し出家の形を
少叔又從三位系系杖や有範系々ひきり
形ひて終る九歳の時天台宗系系大悟心乃

男子よめて、範宴が納まの公と申す夫より、般六
乞より根中堂の某師如來、千日の系信あり
將六角堂の觀世音へ百お糸詣ありて、救世喜
房の若令よりして法然坊の才子とあり、吾水
よりめりあり、時より二十九歳、緯空と号す、或夜
六角堂救世菩薩の西よりして、若令信く、とてか
けむひて、四句の文をとり、行者宿報設
女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨
終引導生極樂 多々は法然上人の西よりして、月
輪淨定、教下、兼實云の西よりして、西よりして、
の行者と云えり、ひありて、一人我より、婦ハれ娘と死
して、妻帯とす、末世の以去より、於此昂善提の

從すす、とありて、別緯堂と傳して、四句の傳
を授け、西よりして、かの觀世音の行者宿報設女犯
の四句とあり、室よりして、止りて、玉娘とす、
かゝらひ、西よりして、十八歳、聖人より、三十一歳、
は、三十三歳の時、越後よりして、流罪法然上人より
七依國へ流罪、是より、山へ南都より、の差違より、
く、は、三十九歳の時、勅免あり、法然上人より、
了りて、西よりして、降土、法然の一家より、弘め、弘長二、
十月、廿八日、入寂、時より、年九十歳、は、法然より、
より、越て、勅免あり、西よりして、正當を、
慈徳とす、西よりして、西よりして、西よりして、
下より、西派とす、西東佛堂寺より、田派、真正寺

外に錦織寺といふ一派越前縣にあり

尾をうの栗川より云志け
ゆらひ中より西から料の理
つゝ終つ

三十里尾端大根乃崎一の子

一書に幻住菴左伝の時吹く名古屋を
三十里こし

以上は書居りしりう去大根

大根引といふ事と

鞍 彦より小坊より系や大根引

去東抄に白風云はけいいうがる亦ありり
左東曰吾子今解りけりうむ只云りて云

るる也一たどくをを思するも奇山巖谷天
社古守林深窠よのうをを因能うむ
う都よ古来多し一形めめう教と雲の画
さよあはは種うううをををさす
又思ふなりて形好すかぬめあむ
是あはえ来是のあきとて用ひれす
今めつうくむ情の終むるあはを
たて画とがうてりもかむるあはを
かむむしれを大根引の續よとむるの首
お下けしむ鞍彦より小坊よのちりると
あはる雲多し古がむむかむむや
あやうんく風玉うんく見何来く

布て感動す修く修結を知らずと云ふ
画を能くするゆへに

愚考何書も大根引といふ事と云ふれ
るる大根引といふ事と云ふれをかく
引りくるゆへに

玄虎子の猿結うて大根
とて啼犬す

我々の大根うて此啼うて

愚考何書も大根引といふ事と云ふれ
るる大根引といふ事と云ふれをかく
引りくるゆへに

玄虎子の猿結うて大根
とて啼犬す

愚考何書も大根引といふ事と云ふれ
るる大根引といふ事と云ふれをかく
引りくるゆへに

いふ又賣ふありと云ふるもその日
萩もよきと云ふるもその日
て一の字カリと云ふるもその日
よむ

夷傳歌賣ふ袴 忌せむらう

こゝの地を待の女うある草賣

素衣を本高をくもて

あり牡丹のちりよ 吾乃杜や

そののちりよ 吾乃杜や

不のちりよ 吾乃杜や

地を飛鷹の柱より虫角

明方のや白魚志ろきり一寸

悪考いかりる中へや神田尻より多の部れ
句吸ふ書入るるいつたよりあつても其本あつり
客ふあはる白魚々々のうちもそとるり
えききつるがれを眼茶体の旅体といひおあ
うや

形蝶云は及び紀よ始々を言る一とあり場よ
明方のやとあり

全人云杜詩一雙白魚不受釣は魯隣
原約人所得多少答云此知浅惟一雙白魚
三寸不受釣といつり一寸の字眼は是れ

よれるあぐり

何葉安適のぬり牛筋

系舟一りり

一長船てささくくむるあを

え船和舟より浦をむらう

りりわくりりたてすりり

水さく舟入るるる 鴨り部

糸ろや定ま入口の 新をきき

さひしきや湯ちもさくちるは

仙化つ又進る

神のよまされてさき 流嵐

吉野まらけりりりりりりりり

愚考碎瑣集の云紫神天皇の所時日本
今のことと違ふべき所あるをすけしへさる
あつたれを神に祈りあふまよはるる人の
墓山々今山々傳山の末申の字欠て飛来
りつる方れてつと喜神山と成つる流波
せし物とされを古今集よもろくの古歌の
少くよみ拾遺集のころもろくの古歌流波
とよめり

そとさうねや不破の雲ちる人を後
ごとく焼ての掛あつるをさる
一書よ三池お池下の茶屋とあり
故時と流波下ま池村といふ所とてのつら

予の三河承よせむ
一書よ松葉をゴといふは昔の歌
一書よ三河集よ不破の所池部郡の宿乃
よ後年司を抱へおむ去るの曲突と流る
一書よ松葉焼てとせりめゆ多分この
多かむ

李の下り妻の悼よ
被きふの蒲葉やをまきぬや清き
よよまくと枕をまき入らば
鉄人と古田の歌よとあるを
まきけれと二人結縁て頼りさ
愚考流少細言よまのいみじくまき

よおのりと地をうけてはげしき障の音の只お
の庭がらやうよげやうよおう——ききかへる
侍もありぬ——

塩網の 遠くききもきき——魚の柳

是うそまきの力といふよきよ山嶺呼山月落
とけうききもおすこき巴岐の猿よせて客
の月とやこけう浪衣声とけう——侍の侍侍
こもりよこけうやけい白感心のよきよ塩網の
遠くききもおすこきけう——やあひよせられらむ
長空の形よこけうけう——て老の果年の暮
しよききぬききよ文字を魚の石とよきぬ
ころよ侍侍の妙と知れぬ——其の遊休よきよ

遠せらぬ侍ハバをこけうて知れぬ——

葱白くけいひあけぬ——ききこけい
遠ききよ裁とききよききこけい

風来寺よ系糸——

表はひよけいけいけい——弦将也

五考の風来寺略縁起よ回鏡堂ありそれ後ら
四智よのけいけいけいけい——時よ系糸遠智
けいけいけいけいけいけいけい——侍あり侍人の
けいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
佛よけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
尔ありけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい

屏表 空松蕭瑟如有声 隔窗微茫如有情
は画屏の侍と海くありひよをむよと又や知葉
とも再葉ともよびは元系あきらうし

晴西堂

湖水の改く遠ゆく田螺一丈
そらるれ蟹の続をわかれよ
牛よりくるもあきく事
なうれ

歎は休や田螺のまきもあきれ
志もくくく総り居る人
志もくくくあて
志もくくく梅と心のあきれ

二方の住人への解すおかの歎は休はよくくや
この屯の奇をゆき

千川亭

おくくく休次をええや冬も花
智者楽水仁者乐山 表徳は川あり山あり
山あり

かいつくく軽ん合せて又遠入
かいつくくく鳥なりイヨも云鳥 能 能
羸 鷗 雉 水 等 等 等 等 等 等 等 等
美衣よ出たへ
己くくくく枕と鴨のくくく
敬毛よ包きてぬくくく 鴨のく

曰くはあれを子あまは後心ゆく一ぬるよ人の
をたきしれぬるも一かきうらさるる
あそれちうらうらうら子の子一は驚き
らちをうらうらうらとらうられりかき
もひくかきうらうら人うらうらをて一
よむこちくく一てうらうらひの笛竹乃一
れうらうら人うらうらうらうらうら
ぬ天をうらうらうらうらうらうら
してうらうらうらうらうらうら
あうらうらうらうらうらうら
一書よけりうらうらうらうら
黄山の金 おれうらうらうら

他のつらきあわく一けれとさひらみ
一あうてを心用といふ下一黄山を地名と
心用する御せあり只を黄山と云う
韓昌黎余上賈清列書豊山上有鐘馬人所
不不到霜既降則鏗然鳴蓋其之感也
一書よ云信中玉衣信はまよを云あり社人
玉後とて一の幣と云云并よりつら法を
修すれを云明初すをひらさむ十所
一書よ云信中玉衣信はまよを云あり社人
一書よ云匡序卿の所司り砂の尾上の障乃
一書よ云ありあうらうらうらうら
愚考貞享の吹うらうらあうら天和年の信

なり次は猪中の冬解あつて山海経に曰
豊山有九雉霜降則自鳴云云近哉集より云
雉と申す十月を言ふ事にしてひとを以てり云

去る四友を送りて強を
す

衣を踏て珍跛引きて送りたり
あてりなりく打や衣友のそく
衣をきて衣かきく子り
衣結よこく辛辛のむせ
以上皆古個なり

葛の蔓の表へせり衣の
皆又ふ字なりこの衣とす

愚考葛とすて表の白さよのこ
かひのみじろの山の葛うらうら吹かす
秋とすよなり又山星と布面の表葛葉
を志けりうら吹返す秋をよらうら
こく衣の蔓のうらうらとせり秋の風
とよる結せり又それを一結して表を
垂るれと妙の妙を

かきく衣の表
衣すもや氷くす霜
火を焼て今宵も衣根の表
ひつち田よ衣のむえり
衣衣も衣や垂ると括てえ

鶴鶴の足え膝一橋乃表
采人の草席を傍よ

これこそおあれさき片の表の表
七部大後よ身一

汝川大橋成蛇せし時
有かややいして踏橋の表

一書よ云え縁ふ年汝川の大橋新くくくく
まよとふはし一

愚考却ておどして新銀のみのら二十年
ませのよ一際よ心持も後もありていうめ
く罵くくあようどれうたて天下の大事よ
おあくと何ぞを急ぐも急ぐも

病中

茶のむくくくく表の橋

古に世は急いで
表の橋 橋子 咲く大桶

一書よ云え表大桶とも思われす今く世よと
汝川の陶器よして大なるもの信よふあつ
といふものやうむく一桐大桶よ鬮雀表をも画
くくくハ中古よりのもくくく後水尾院の御製
とも又東福の表の少好なり人々表の信
具よとい大桶も表され今くむくく人乃
折くく表となりてけはハ橋子の表よくく急て
有けくくと銀くくく

源新之号ハ其の季も入屋かむもよる其の好
と云下ノ火桶と云あり其を体よみてしひた
せしかゝら拵子ハ其のよて有下し其花ハ
ハ花用埃よ其花と仇れをて火桶の火れ花
やかよをりてその本と足なりて拵子の足
如くといやや拵子と拵子ハ赤きものなり
又火桶ハ中古より拵子と画けられしを
よせある事よて二つおのてかくはる仇り
可る下しとい後も又拵子
いかしぬ拵子と云る合ありて一体も火桶の
白されしを火桶と画きし拵子と云るし
しひしや拵子ハ其の白と云りれ伝る法

集皆反よ出し重しれを予も又改め後
盤と傳のし

一書よ反の部しといやと為後しとも死か
うりし火桶と拵子拵子と云る事その中とを
又ゆれと云るの白と云る古款は拵子と云る
ありこの京れをいれしと云るかをいしな
てし又火桶と画しる事ハ源氏書の圖よ其
ありたきし拵子と云るの圖ありし拵子
うりし又其の雙の鳥ありし拵子と云る
俗人ありし拵子と云る事ハ拵子と云る
拵子と云る合ありし事ハ拵子と云る
愚考ありし事ハ拵子と云る事ハ拵子と云る

旅のやうに結ぶらうきき居
心を定て

何れの旅のちり紙や並火燧

一書は炭紙ぬとみ文字を書き非あり
一書は並巨燧よかごころし旅の心をい
いよごころくと居てかごころぬさぬと並火燧の
心よといふ意

一書は其の角云と並炭紙尚の奇は「旅の世
」又旅紙して書きすころ炭の中よりその
とをえらひとよきをせむひよおりの人か
傳へしとあり

故蝶云李経朝臣ぶうれかのらむれてあり

旅やうにすころし紙のよそありける
歌を奪紙換骨したるものよそを旅と並火
燧とら何れをよきものなれを

小井炭や白炭やかの浦崎う老乃翁

評六序

白炭よ翁刻る音う小井の歌

三面大黒の歌

忘るやまの神の双中の締く

祖の糸の糸書よけ画かきとく人も繪念内
記とく十三巻よあし一巻のたごひのうつくし
かりけれを紙句書けるとき三面大黒未考

大正天皇の兩域徳育の對の権はみまうに並行
飲食とさうし神をたてて大正天皇といふ
も是等の保後より大己貴命とあふる

貞徳翁の誓

徳兼知名やあつぬ翁の丸双中

知名チナやあつぬ翁の丸双中

一書よ志うぬ翁といふるも古々著家集
形廣王の事この氣を移す事のけしきとかな
らぬと家方の志ぬおまはるとそむる

一書よ百菴うろくまふと引て云志うぬ翁といふ
半く指遺系旋双欵の両寸かゝるそこの
うらむじくひ居てみる内より其志うぬ翁

あつぬ比すれに存種を菴宗徳法師画像
自徳より引つてあつぬ翁といふ世のうら
まを志うぬ翁とらふぬ翁といふ翁の
うけわれぬ翁といふ翁といふ翁を立入て貞
徳の誓いせしむる

一書よは知名やといふやと歎嘆のやまて
切ややう知名と能知るる翁をかく
又文字の歎嘆なり句念と知名と
勝然丸といふ翁といふ翁といふ翁を
あつぬ翁といふ翁といふ翁の詞を載
入てその知名とえ来極くすさす此の
七双丸とせしむるは道の世俗やまの

やさ翁と名れを著し、いしくそよよとくかあふ
よ今いふををんくよまの對せしひりてた及
中の侍いふく古くききと余情を合
めしる白なり

悪考初名やよとく白情を明なすは貞徳翁
と名あそく八十を存常あり跡まき襲の結
振角よの正しなれをいとやなくはやとよ
美よまて白情合し初名やと初名やと
書得りて子載よあやまちを跡守をさす
名と知りこりこそとくを名のるよ
及にすは境をよりく考へるを著てよぬ
翁とく所通季吟の作して御後の先達と

歎矣てりりのそ初名よとがらふよとを

你川八景の句

茶買よ名の袋や投及中

一書よ你川八景と有る茶買よけを雪と
いひけて袋よ及中よかろくこらゆなり
一書よ是ら名の日の身よ你川芭蕉庵よ八
人あ人おこるは菊がせとせむいさ茶買よし
紙の袋よのて出初なうらそを袋よと書よ
及中よのうらそをあくぬ品魚のおう
みなり
一書よ名の袋よとひひくよとそこの
よ名の袋よと名入さやうやうばやと歎息

のやほあはるるのやほあはるる
やほあはるるのやほあはるる
くくくくくくくくくく

悪考そのいよちの信を投及中といふを
袋といふ信の信を投及中といふを
袋といふ信の信を投及中といふを
袋といふ信の信を投及中といふを
袋といふ信の信を投及中といふを
袋といふ信の信を投及中といふを
袋といふ信の信を投及中といふを
袋といふ信の信を投及中といふを
袋といふ信の信を投及中といふを
袋といふ信の信を投及中といふを

あはるるのやほあはるる
あはるるのやほあはるる
あはるるのやほあはるる

或はあはるるのやほあはるる
或はあはるるのやほあはるる

是寺のうすい信むや何脈汁
是寺のうすい信むや何脈汁
是寺のうすい信むや何脈汁

あはるるのやほあはるる
あはるるのやほあはるる

胡蝶七星の詩謝天運司親慶子想
任公釣又るる水の水の浦
つり網つりつりつりつりつりつり
のひひひひひひひひひひひひひひ

熱田梅人亭 雲裏の果と魚
いよせや九衛弁といふも
然しそ

水仙や白き厚子乃とよらうり
三河の白鳥とらうらめく
子二人、柳と植塔の名を
よみて

そら白ひ極らうりも白しそ
此世月の名を種もや水仙也

公石を史よ白六月の古用よ入日塔出毎日
炎天よ初し薬けとくけ去利終る日よ極
て毎日水とそけとをよくそまきのひるそ

水毎月の名と種とらそそらうり
愚考事文取聚よ黄魯直侍借水用花自一身
水尻為骨玉鳥肌暗香已壓醪醪倒只比寒
梅無好枝又全詩得氷能仙天與奇定香寂
冥勤氷肌仙風道骨今後有冷掃娥眉
一枝みそ水をめて仙とすそそ目までそ
あきうらうり

涼川冬夜の感

樽の多波を打て腸氷る夜や泪

葦舎買水

氷若く偃麗の咽を淫せし

愚考うらそ竹由之王治天下天下改己治

矣而我代子吾將為名乎名者實之實也
昔將為實乎鯨鯨巢於深林不過一枝樞前
飲河不過涸腹也

年中之位侘て

糸糸飽氷の枯するさうね
せまうさうさう氷さうせしめ荒れ

冬を扱

幾あれたる氷の森は引
落氷お目の中は茶中引
芥燒や猪喘の田井の落氷
愚考万葉一能披紙のすそわの田井と秋田
芥妹うやうむあまよおりや又巻白糸

刊をわの田井と根芥をうみ糸面のはよ
くわあそと拾ふけさう外又人しなれハキ
又小堀山の記より六大系中の根芥をつび又
巻白糸同六大系のうすそわの田井と根芥を
つびてことわざはかく根削めおろき中一
後多相模の御製は根芥つむせ及の水の
うす氷さうさうさうぬま風そみく

辨治出羽守氏雲亭

面白く雪の中をうむるの事

氏雲未考

晴くちを中をうむるかうて根の事
是より寛文五年の吟とせし

子よおれおれする人の許よて
志ありれふ守や世と逢枝の雪の竹
うきふりや世と逢枝の雪の竹
寛文七年の吟かの小督を去の位をとん合
る

山と描袖うらをいてや雪のひま
悪毒と何とつとつとつこの雪
柳岸と描山悪毒とつとつとつとつ
二句ありを古調し

雪の竹 苗 伝るるる 節あふむ
雪とつとつとつとつとつとつとつとつ
雪白し いくさぬ 二種ののちをんや

雪ふつとつとつとつとつとつとつとつ
ぬれ蓑をる手柄よし 雪見か
大ゆきや篠くひとつとつとつとつとつ
茶臼よ 眠る 児の画よ 賛り
つとつとつとつとつとつとつとつとつ
り法の雪根原を雪を 死 琴 々 劫
雪さふり 馬よもの ぬ 家 又 け
其の中 くに を つとつとつとつとつとつ
此のあり 舟 集よ ぬる ぬ 雪 落さぬ や ぬ 枝
折る ぬ ぬ ぬ の 回 作 する ぬ 雪 采 々
雪 見 ぬ 道 途 して 抱 月 意 々
市人よ いて 雪 夢 々 雪 の 雪

箱根越す人もあらずしは此の雪
公名云本朝年代記云元明天皇和銅七年相
伊豆の境箱根山の路を過く尤箱根を相
州の地なり

箱根人を又る

馬をそへちる雪にわいんか

雪梅の歌を陳業言亭より

少もらうりしに雪を并雅章

の君都を帰てくと詠て主よ

給てりしを又て

京よりしるす中 天や雪の雪

愚考すてし書なり中 空まやたし

と非なり花を井雅章卿と権大納言と
関東へ山下向れ折りたるへ一延宝中よ薨
「うらひぬれもをく吟海印を
りきうし中只なりて
そたるりき海とてし業名の海をよ

契田宮所修す復ぬ

歴きささし境も清し雪に

愚考契田神社と祭神五座第一天照皇太神
才二素盞鳴尊才三日本武尊才四宮簀姫命
才五建稻種命と土用殿と称すし中亦
草薙寶劔なり日本紀曰素盞鳥尊乃以地
韓劔之劔斬以頭斬腸斬尾之時劔又少

裂尾而看即別有一劍焉名為草薙劍此劍昔
在素盞烏尊許今在尾張國也

同紀曰景行天皇五十一年秋八月日本武尊所佩草
薙橫刀是今在尾張國換田社也

貞享元年たみあふさ人のむらて此作同三年たみく
去年の院標を思ひ出さず

越人ト一賜に於

二人又一雪を以て年七降よりり

愚考千載集より「も海にもにえ一人いづく
かよりあゝあ月をむりよかちりしは里龜
の侍れさりと色と二人猿抹えたのもしきと
あつらゝるおま年のひきさり

信濃路をよむ

雪を以て年七降よりり

一書に信濃諏訪大明神御射山祭七月廿七日也
舊の種をもつて所及屋を造り小をを建て
神饗よりかふ依く種を以て神事とすも
いへる古言多し「尾むかく種屋のあつら
れ一むくまきり」てある秋れくもあつら
「おたゆふ山田の時のおくもき新入さしに
あつらひたれおれ」此詞より此分のあつら
かふひて名ふり
是考の諏訪り昔諏訪のまきりて西武尊天
三年諏訪をよて信濃よかむさる一國とす

今より詠物歌として言すなり又御射山とのやと田
 村麿安陪言の鹿を伐むとめは信濃のふいこむき
 所神武運を祈りては人誦詠物歌のまよ
 するをかくしをまを射りて此は御射山とのやと
 とらふは七月廿七日の詠物歌の東の
 山より系を新きて信濃を所れ種をて次
 ありは種をまるといひて種は種を形とて
 公白云我も肉歌の詠物歌の氏子も十月詠物
 文社よりあやつてよとて詠物歌の信社をて社
 らもつ詠物歌をて種は種をて收納して
 十月系をてつては見すて一詩なり

名詠八作の末

松崎中雪は白埃の衣くはらふ
 此は古調をててはかくして言はるる

画賛

いさちくく雪見えよははらふ
 竹は雪をててはかくて雀あり
 一書劉得行詩ニ樹揺幽鳥夢堂入定僧衣の付あり
 山中よるの供とてはひき

初より先の皮に懸つたり
老考白氏文集に記載七八歳倚杖三四見弄弄
復圖草を自樂嬉々此奪胎換骨云

奈良より

初ゆきやいゆ大佛の柱立

公石云孝良の丈仏と聖武帝の石子創を
行基大菩薩と勅して佛像成と本朝年代
記より見えたり又良辨僧正とも見え
婆羅門僧正とも和漢三才図會より良辨
佛像を請ふと云ふ殿のころ廿五丈六尺と
多しと後教夜の美上或と雷火寺と
故火の
為よ也録ゆると相寛永の美上より此句の事

より四十年より及へといつ大佛の柱立と數尺
一たるなり

又一傳あり雪懸といつ大佛の瓦葺とハ淋し
則大佛之像

面長一丈六尺廣九尺五寸
目長三尺九寸
鼻口三尺六寸徑二尺
頤長一尺六寸
肘長一丈五尺
掌長一丈三尺
脛二丈三尺八寸
膝前徑三丈九尺

胸長二丈九尺
肩五尺四寸五分
日三尺七寸
頸二尺六寸五分
螺髮九百六十六高
肩徑二丈八尺七寸
腹長一丈三尺
中脂五尺周四尺寸
膝厚サ七尺

足裏一丈三尺

土蓮花 周三十四丈七尺
高廿八尺

花 二百八十枚
周三十一丈四尺

蓮花銅座 徑六丈八尺
高廿一丈

基 周二十三丈九尺

佛工

番匠 後五位下稻部百世 後四位下國公麻呂

後五位下稻部繩手

百濟人也

冶工 後五位下柳本男玉

後五位下高市真國

後五位下高市真磨

我るに延喜 正曆 天喜 治美 永正等數度の

突上よて在しをわたりけりての今より下

旅中

つづ雪や 聖王小僧の笈 此心路

臣考 聖王小僧より 聖の若僧をりて 成

おのり喜の 誰人とも ちむそ母

ゆはせし きて 老の 後志 賀の

里にかゝれ 侍りし こと あり

今 大付 社を 祈り 聖智 庵と

いふ 老尼の 許し 尋常 寺にて かる

る こと といひ 出づる つひ とも

あり 海に あり

少将 弘尼の 咄し 志賀の 雪

一言よ 井陘 抄よ 藤原 門院 少将 一おのり 喜に

つづ わらぬ の 何れ とも とも とも おもひ 志して

多るたなる〜此が将尼よなるとして大は〜
路るが持の尼といふ智月尼と乙州の母尼母
親して俱々稱はるは白たより

我々の戸の初雪見むと余
不母あつてもいそぎ踊ると
あや〜びさるるに沙を
ハり〜めて雪降るは

初雪や幸しい暮よまのり
且考白氏文集は蘭省花時錦帳下
夜草菴中かよの情も似る

曾良何果も此あ〜
く仮母居を志めて舞を

ゆふたのいとひつ岡の家食お
をいとたむと〜紫をり
〜たさ〜茶茶
烹る時来つ〜氷をた〜
隠果を好む人母〜
あ〜威叔雪〜
れ〜

君火〜け〜お見せむ雪丸け
且考曾良も信忍誦話の産よ〜
〜侍を公た〜と中侍〜此酒ま
よ〜退身してト居〜
こそ要細乃の同行よ〜

よき形令の交りとし縁こひてかくらたうふれ
玉ひし之形令の交りとし二人同心して令を
形としふまをさうふれ

卒姫婆小町賛

あまのたふふとし 世もそよし
まもたふふとし つかれの人
かこし傳へいふふれ人々写し
とめさる子裁のまげ後
今あつに現すそのくちあ
と来も魂も又空にあふむ
暮もそよし 暮もたふふ
あつに伝ふ雪ふれ日も暮と

兼考 卒姫婆小町と音曲七小町のつらさ
石罫 草子洗 嬰武 園る 卒姫婆の法
通 山本さう小町の傳と七部大鏡み妻

閑居箴

あつに伝ふ雪ふれ日も暮と
人のとむひあふもくふれ
人あもまふえし人あまふ
あつに伝ふ雪ふれ日も暮と

物さふさしはる月の如雪の目
あま友の志をいさむももちり
ふしやおをいさむは獨り
のこころ心よむいかにか
庭の戸をいぬく雪をたふ
すこころをいさむて草花
そをるをいさむもは
くさのさあや

酒の免をいさむおぬおの雪

思考歳々文章四十余法の一く事文類聚に曰
歳所以攻疾人の病状を療はるなり孔子
顔淵は四歳ありといく非禮勿視非礼勿

聽非礼勿言非礼勿動とくく是は代を歳
すくさりいぬく我くお牙を歳すなり

湖水眺望

比良三上雪かけわりせ雪の橋
杳雲云比良ハ西色江三上山を湖東を居
凡二り斗りと見えゆかきさの橋を心底よ
さする白作あり

為情む鳥も雪は河一いぢ
さる危よ士あり

本邦のあらし裁ふやおの雪
ゆきさしよ梁たをむ住みお
初雪や多仙の葉は撲むけと

画賛

たゞしくても雪まら竹のぐささ

杜園亭よて中おしき人の

しつとつてつて後ひら

雪とゆき今宵ゆきの名月を

寒山拾得の賛

を揮う雪をわきまて筆か

愚考之山拾得の事三教集に於て書よ曰

豊于謂罔丘胤曰寒山文珠懸迹国清拾得

普賢状如貪子胤到二国清礼拜ス二人連声

唱云豊于饒舌ナリ饒舌といふ多言の義く

文殊普賢といふといふ多言之と記に

深川大橋を至かるといふに

初雪をかかけかるといふ橋に上

雪の初をとり干鞋を踏切ると

虎や不惟子雪を小段の橋

愚考右調よりかきしりゆきを略し

夕比う雪とも季を序よせるといふ

たむけのいひかけし

あやあや舞人や虎の板庇

板のまゝにまかつるあやま

画賛

琵琶の弦の玉あは

一本よるあはしとせらと如何せんあはし

玉昭天馬上下も琵琶を弾きしきりて
昭々怨とりよよとれさす一羽さすきり
あしゆれとも昭々も琵琶ののねとあれ
て白樂天の琵琶のの義に極まつて其曲
六百二十二言のくち大絃嘈々如急雨小絃切く
如私語嘈々切く錯雜彈大珠小珠落玉盤
是の句をみて小玉あしゆれの字昭々
ゆゑ長琵琶のねとあれを得てよて此
お曲よいよしうひてさすきりて

ふ〜〜ひ芭蕉意を言て
雨き〜〜や此才ももとの古 格
いさ子侍をりあ〜〜む玉を

愚考万葉集よ「いさ子ともか〜ひの溜よ白ぬ
の夜ゆ〜めきてあさ葉つ〜〜を此等の續写
夏怨さす

いこのめ〜〜牙きやあ〜〜き此捨笠
秋葉云山あ〜〜尺「あ〜〜ま〜〜をの免〜〜
くもさ〜〜る枯き〜〜を〜〜此葉はあ〜〜

船はのそのを人を訪ひるに
あ〜〜せよ綱代の氷魚煮て出さむ
雑飲よ琵琶字斬死虎うね
いさ〜〜ひ新考引みるあ〜〜は
か〜〜や何〜〜夜を先有る人

是ハ古調ナリ

干鐘ト空也乃彼ト空也均

左傳云空也中々書中にして乾向々鐘也
空也亦リカク鐘也管ハ及々さきて不
也也也何切に苦身し事れを瘦の字に
句法を好事り事の中におもいしこの
此場より古今集二段切の條に空也
空鐘も枯本に空の親也と云々
も空の中の時時を事せ空也と云々
何れを結ぶ事仲は二字とも更
瘦の一と云々互照の格を稱す
是方空也上人と天禄三年九月十一日遊寸といへ

とも晩年後引にありし京師を出て東山
赴く日徒骨に云て昔既みをさるる
歸らむるをさるる一則今月今日寺に
出ると月をもて忌日にせよと云くその
尺書よ人をくつけしり空よその内の
苦行をあつたり

長嘯此墳もめくら詠打

一書に長嘯子と本下著狭者と号し令
中納言秀秋の舎見する後世をよみて
洛東靈山よかまきと和歌詠を安
の始率しよ其詠を何つ先く擧白集
と云小嶺山の事なり古墳あり

愚考綿繡後之神教中より定り申され
一に「まゐるはらまじり水を去来兼出せし孫
ても見えむ神さきと申し明くあるは
しれをとも家書ありしは此句ありて一
歩に在る必以名嘴の墓をすても出るるとの
白作すし則ち嘴の墓より出るるは
さし此一をとも家の教さるるまゝ有るま
とまゝ神さきとの教是らち一めて録出
たるとあるはかくとも無し申されしを
狗夏切る者志げ申して録せし
妻たるよりよき隠家や細村
愚考ちよけ村と尾張の地名するは

月一語きし沙を子路と孫見し
一書は沙走の月比中を申し子路を
いへるは「中」枕子紙よりさるる
しは「中」の月とありし
所據之を冬の月を凍くして白きを
子路と孫見し思ひたるは「中」の
孫見し心ち孫子といへる平旦の
同一く物欲を交する本然の良心
清明の光を孫を孫見しと家語の
すし又枕子紙より「中」の師を
月とつるを申すは
愚考家語子路家父親不擇祿而仕昔

者由也為親百里負米親沒南游於楚從
車百乘累茵而坐列鼎而食願負米百里豈
可得乎云々此云々子路云々親没して今
存分の富貴云々はよくはといへとも親たが
を思はる人なく所會骨體云々は通るもの文
後さあ又親存もよみか云々時親と君とに
わくれ今かくたおこ云々を親たるは
翁く少々存分に雷鳴云々を親たるは
見らる人なく所會子路云々は等し
いふるを所をの月おの云々は等し
たへ述懐して蘇えを後ふの終り

されを家語の志子路云々述懐といふの述懐
とよくし考へ云々なして云々を味ふて
叔法人の見る所子路云々勇之といふは
くみ云々す云々も心持云々は
大は非云々す云々勇云々は
師云々の月おの云々は
辨云々は云有陸則法云々魚云々辨云々是陳云々法良智
略云々矣云々金云々上云々誅云々月云々明云々叔云々法云々則云々夜云々子云々路
彼云々危云々掛云々油云々紫云々紅云々畫云々推云々奇云々汀云々終云々日云々成云々樊云々金云々勇
是云々も云々知云々る云々を云々す云々は云々き云々と
い云々は云々張云々飛云々樊云々噲云々辨云々慶云々金云々時云々何云々そ云々子云々路云々一云々人云々は
限云々ら云々ば云々蘇云々え云々と云々又云々述云々懐云々の云々心云々は云々と

新く一被義仲の掃笈の山々存燃しとて
ありし只く心をあつて若くは若くは
有義仲の掃笈懐古さう此掃笈を自才よ
述懐するの子路とくを存すのさう

十二月九日一井亭

猿嶽一宿と原をの文月叔

雨虎雪も氷と沙をの那

何み此沙を氷一宿よゆく馬

一本よいうは此と五文字を出すも
三の紙よ此句と五文字にいき自は
愚考源氏よ判らうしきいろとさ
に此来つむを成おまひそめり心此五文字

之入さりとる

公石云扱馬も自才此馬を破るは
信徳よても事よとあそく馬を二市馬
を違ふて大まにおろろをたうと
五文字も事の用を身に出る物と
かくさうと原を氷沙のわいて

一書云此句かいつありは白とる
世中の節年よ白さう沙をといよ
考よるその人れををさうとせ
やかいつかいつのさうめけか
長評が俗解をさうとあつたを
賦や伊田の曲さうとあつた

屏風をよかきひきし火鉢に
子来をよかきひきし姫子帷子に
上をよかきひきしの又くし
足袋もよかきひきし
てよかきひきし
隅田交とも取ちりたる
中にお佛のうしりか
同くよかきひきし
子に杯の破り妻子の下
取まよかきひきし
よやとあやし味咄とほ
大男の代名かかきし

もめつううにまむのけん
うら有翅きけり
張かてうらむに
かげらうらむに
か能長きうらむに
まむうらむに
まむうらむに
まむうらむに
まむうらむに

煤

一書二寂蓮法師
是也其様よほめ古 盒子
送るよかきひきを

まゝもむ花の扉はあけなれぬやうに下階
茂志東云家連れかたに是や毒のくさふ後
弊をかろくもこの扉を古極みればさびまか
あつた作らるゝ

一書又云の葉は後より射して換投の台と云
きりりやうや中しよむらりやうとて門戸
あつゝゝゝかやんあつち中しよむらりやうとて門戸
やあゝゝゝ世の古く整もけのさきんは流し
あひゝゝゝ換子くと其人よたをゝゝゝと終
やゝゝゝ白さり

是考此考書對門人傳とありて古換子と
て出れ大きに唯く換子に古換子とあり

いゝ何日にも古立番の方化るへは是を
此考一書を味ふる

すし換子と已々桐つる大工の歌

既川亭

書を換子と梅と花と軒
うちまのさる花入さるさ 梅 桂

此甲を不ひとりよる者
院の帯れけめさせまみ地
によらしてなくむとりよし
里人のあつてはつるを何れ
人の書とめまゝれとて
傳れよしかくはく美傳る

梅核早咲つるむ保長つきの里
是考二本よいつきの所代ともあつて
何やふふとて神の厨もとつた名も
いふかこきと出るものおと
出せしむる不うひのそ梅も
の縁を

究文 辛 癸 師をの末梅を老
の許まで

梅 雪の落やめをよ梅 芬

愚考 荀子曰節奏陵而文生民寬而安上文下安
功名也又万葉よ今日零々雪尔競而我屋戸之を
本乃梅者花園二家里の古身を

果の朝りれ朝ら

節 果よれの身てを風物ては

節 果よれを雀れ笑ふ出を

あつたを僕隷の名と首あはれの出を
あやしきを下帝の才かに入れてしけ
かよしつふさや雀の比喩をよし生や

傳りの言に骨ま

餅を夢よ折餅よ齒乃木の系枕

くきくして餅を研の候

宵ゆも海りさちりもちの言

一書よ「あま」に人よれぬ牙のむや
みそり母ちるき有ぬの月と

年一忘也三人より此を忘るる
也と曰く大も端やらば猶月未
系却を去るに之を忘るる也
又春を忘るる也

人に家を買はせり我も年忘れ
此の如き流るる年の流るる心
洛比所靈ふる景桃丸無り

半日と神を友とや年やると
魚多の心と去るる心と忘るる

愚考 莊子與惠子遊於濠梁之上言莊子曰
儻然出遊從容是魚樂也惠子曰子非魚安
我安知我不知魚之樂乎略又方丈記子曰魚鳥

の分^{アリサテ}を又よ魚と多し肥れ莫くありて
主心を忘るる心と林を斬るる心と
是も心と心を去るる心と閑居の忘味又此の如し
何れも心と去るる心と

やらうに年一忘れも多し様々
一休の去るる心と
年一忘れ線香冥に出るる心と
終極を人ふるとの免るる心と

画賛

行々や汝、親の心松
り年やるる心と
画賛

次丁の浦比年迄も柴一把
 一書は海ある方よ柴一把ありしり画一といは
 梅柳しりしり年一の由投しれ
 公取云由投しり年一の由は梅柳を出入り
 也一はや蟹の由しりしり伊勢系
 山吹や井の長者を年一の由
 愚考山吹し井の長者を出入り巧なるへし
 彼井手左大臣殿のむしりしりおもひ合さるる
 義保一

忘世の業飯よりむ事の時
 愚考英民業は世業兼名花より忘世

一り業を余におよし此世業よりなよありて秋の
 木より松よりけりかの信長の岩におかすよ
 一ふしりふたれしりむしりて考

うくしと年よふ人や 古曆

ありに業をとりきかしこよ
 節を木よりしり業をまうしり

也一業めを金よりしりしり
 乞てくしりしり業をくしりしり

うにとりの業をくしり
 めてくしり人の業も入しりしり
 ありしりしりしりしりしり

抱後云 唐川百三十一「あみあみ成候とも
ち―にゆくまてふと―もりふに成ころり
盗人よあつたおしあり季のそも
一書よおのむく―れ富貴と今の徳を人をも
替―く今もくもぬくもれもるをぬき
年比その名跡も物もむとと嘆息―と
作りよみたり

代しれ賢き人しと右に
志まかこきもれよおしは
作りよ―我今もけり乃
をも四と空して何するよつ
てもむく―れは所か―き

よち―か―のあもこもい
よふま候も七見捨候て
初冬のやれうち―くぬい
よる雪をかすの書を
ゆきの未伊場の山中よ
かふや父母のいさかかせ
と意あてむく―と
あふよれもあま―り
古郷や麻れ統よ今年れ
ふ別の底もさきり―の
月雪とのさるる―季の
愚考を門実よま有る花秋有月有

茶花並に人甲ちのき山路
此葉よるとかに俾運する不傳授すし
笠をかきくまをへて志る。ぬのち
右三句は諸國の好境。集り見しり
子を脊山妹山おろしうけしや

愚考らちちとち師走の果子女の乞食の怪しき
あをこしと門くは立喫うしそりものをとををを
らちちとちと作し子を脊山妹とち乳母と
ゆせむ巧言なりを女のと食むれを子を脊
おそ出るるく者しを右側し

朝おあを流す川崎をかこあり
四日市より馬よ系て杖突

坂引上げふ新結しちかる
正てるよちのちぬ

歩りちちて杖突坂を登るが
胡蝶云二段切連二り杖よ云此ちち名はの新
よしと論ちち二字切し似るまも水水
二段切しやいもむいも水何とち水
杖つきやし杖をらきて歩りて杖を杖へ
きちとまに一段の詞を返しくるに
なよ登るかとまよ二段の心を度す
此校りて句念内しちち丸光廣
舟の鏡りよし引みちかちよと通し旅人
ちみち杖つきは里とち杖見ちと

抱儀杖突坂と石系師の系なり此坂杖突の
名ありてり日本武尊醒々井の池足を三重
縣に曳下すとき佩るへる而代御劔をた
たし免く杖よりつきまよより三千軍れ今
までも聖帝想夫是を吟ふる大なるを慕
崇しやる自然代徳化成へしと云々
愚考此句に古書法集にもに業名よりくるし
系と有りて非なり業名より名業師直みす
乃み里三十二丁之四日市より石系師直れり次
有りてり必定すなり夕念ハ皇子れ上よてり杖
つりふを括民れ方よりく勿作るき次有之
とくやみまよとるる

新井花よりくち牛屋の形

杉亭云陸放翁荒村寒雨晚凄々四壁頽穿旋
補泥物我元須各安穩自苔牛屋織鷄棲の付
なを

らうらう雨の徒ををるる

世中一しはる不宗祇の舎なり

所據云宗祇法師所の所にて難波の宗園
もくたまより海ひりぬを宗園とらるる
難波津よたふら喰れとかりて船といひ
りるた宗祇ははへる宗をかりしと
何れもいかりし新古今二條院後達の
世より宗祇はくはるしきも此を標の舎なり

浪心銘

草乃靡よひとつらひて始風さひりまをうく
竹面れこもよあふひ妙記のあはれありて
こつらう竹をこりう竹を刺すを筆端ののろと
名の心志つらあふこれを日録のよものうく
たつらつらまをれをあふとあふてあふすけりま
紙をわさひのうふりて又うごうて流とひまの
をりて筆をこりうまふりてかつらうんるり成
思ふれ日すらる程まをやあまよれその
うごら書れりこよまき入ふこぬは吹くうあ
流をそのあをひらうふ知くまうか
ふあありけりすまをれのみりうむう

ゆうこなうらよもこりて西行法師の富士見
坐う東坡居士の雪見坐うま城おれあふ何
つらぬを是の天れ雪は枝をやひらむをあふ
時雨よかこふ声おらうよめてこもよ真す真の
うちよいて像は感すこりけりあふ家
紙の志くれやうてりあふのやうに紙をこら
るりてらうらまのうらうまかつ声侍る
世よおれハルくお字紙のやうか
びう字紙の時雨はすハねやうり世よ
と心おこるらうこら世よ強るら雨
やうらとあやうしんらうて一けらるるのこく
暫時の舎りとおれを字紙の舎りしり

内は時々の如くして侍るなり
妙記より未考

竹取の巧きまやうひ竹を抽けの着のつゆを
人よく知れるおやうひ竹を抽けといふ甲
斐の玉の古事なりとて侍りしやうひ玉名風
土記より昔富士山ノフモトニ竹取ノ翁トテ竹ヲ種テ
アキナニケル者アリ彼ヲキナ菌生竹林ニシテ鶯ノ
卵ヲ見付タリ暖置フノ千程ヲヘテ是ヲヒ
容顔優ナル電姫トナリケリニカレニカレテ養子
トスタケニ後ニカノ翁カ田作りケルトキニ暇ナク
シカハ養母ノ訟ヘテイハク隙ナキ時ニ三河トカマ
手助トナリ給ハサルトナサケナク云ケレハ電姫ユレ

二怒ヲナシテ富士山ノ子ニホリテ山岩ヲ蹴破テ
湯ヲ走ラカシ田ツクル人カレテニ十焼石トナル下略テ
是やうそれとて行はれ侍りたるやう
彼余吾故の天人とて保の松系よりつすの松又後
笠仍りの翁と名をあるとて自称の真やう
雨りの一翁と名をあるとて略す
東坡も宋朝の人宋の仁太家とて侍ると言
書を能くし穂軒字子瞻と号す寸黄列は殿せり
れて東坡居士と号す東坡居士といふ名
是とて別東坡居士と名をあるとて
是の天の雲とて杖を曳む是も七郎大徳冬之記
よくしとて出たり

臘梅やむのー永井の合後

或人云合類節用云臘梅一名黃梅活法本非梅類以
其真梅全時香又相近色酷似蜜梅故名云々此句
昔永井伝ふ唐よりとるをせしむる故事云
信ふと永井之を失より三田代と云は信沈守
尚政のりちり

愚考臘梅と冬梅とを臘梅と黄梅とて異なる
を臘梅と山谷待と一首ありて臘梅の待と法山
と見え侍る臘梅のめりく冬梅とありすむを
何そわさくはさむや然るを合類節用の臘梅を
引と非なるも増山井月も臘月の葉と出せり
句の葉の發くはさむと見え古調なれを如し

追加山峰(うら)

自画契

寺のくく坊の歌や初時雨
苔の葉は咲むよとくれ階灰は
上座うら時雨とまらわ 車坂
時よある柳の脊戸や中の唇
船政の葉は遠へる時よか
石山の石よささるあはれは
屏風より山を絵出てきて
松風や大の舟くる 神よは
頼むそよ森はなまき灰の古紙子
候梅や都の町の船月 灰
舟船や何ふれ浦又年をむ

時あはれや舟の帆總よ夜舟て

むらむらするていれ少れ町の名はくせし

愚考江戸照り降り町を傘下旅笠・書袋の影を
高ふ店多き旅よ町の名とせりそれをていれハ
傘は立草履・書袋うしろなる少れハ下旅笠・書袋
うしろよよて照り降り町の名よこせあれと
村はあよむらりて真一とる旅

大吹雪・暮や志ら任て小豆飯

我為よ日まらうらなり冬の空
浪の花と書りや水は降花
ためつけて雪見は満る鏡衣式

持七よ示す

旧里を去て志をくく田中よ方を
さすらふ人ありて家僕何の
水木の為よ方を若しめてあを
いほしめてまを獺奴阿段の切を
あうそひ陶侃の奴を志す小夜や
及いそ人をさるうくはあかきよ
あゝ下位よ有るも上智のふあり
いりれ石心鉄肝たむむ事なり
あるもそ言をまするうくは

先 祖 一 梅 を こ ころ の る こ も ぞ

愚考持七およし主人ハ誰とも知つらん

水木ハ新水とおぢ 水汲本を別の
働シ杜詩全集ニ山木蒼々落日照竹竿
自衣、細泉分、郡人入夜争餘瀝、稚子尋
原独不闻、病渴三更廻白首、傳声一注濕青
雲曾驚陶侃故奴異怪爾常穿、虎豹群云、
註ニ云晋陶侃傳家僮千餘世説謂胡奴陶範
小字侃別傳曰範侃弟十子也又曰侃奴僕之
多其子胡奴必有祿異之者今日阿段能穿
虎豹群以尋水源以俟特聞云、此言をもて
持て忠義を勘へる一、勺の言ハ大醜子
本女

一匹のを祿馬もや 川子る

燈よ——ていさこつてむねなる
かりて蘇む紫山子の神や秋の雲
初霜や菊のそむる梅の綿
源のやそも浅き火神の如
愚考源のやとあれ、源のよそ源の焼の
火神を題する。又浅き焼の火神の題合せ
そ又古調なり

文がらぬらばもつたて火中か
愚考そは意のかり文よそはかく火神の中よ
灰書——てそ消しくするなりむ不絶の
状の末は極隱密なる時を待たば火中かそ
書よ題句を立ちしる也——

硯このむをるの法作ら巨燈か

愚考硯このむは只あつてはよ——てそ飛の如と
心もそなくぬらひなり——てそちちく端なる
かす階て居てぬむおらうそ室はよ地よきて
火燈よあそりなりそ是思するもそ目茶なり
つ——思ふよ素良の法師よそ階ぬものを
新しを素おせ——そ必能恒形の硯なる——
言よおいて麻の素良よお初そ由一余前よ
うこのぬものことなり——

五つさら茶の子よ並ふいろりか
既中着の教なり——山や繩すれ
湖水うら光り出——り比良の言

雪の日や稚紗のお鏡よりくた霜
笠の弦や咽喰志むる富士の雪
雪花ハ菊の枝やまきさくく
愚考梅櫻すつて菊枝より并くもなるを
雪の花を山の枝より花すつてええて菊の枝を
まきく花を山の枝よりまき梅と他はるは
古調より雪よをうーさのみ

比良雪言

さそく雪白衣のて物比良の雪
雪よこつて

深川や根こりの雪意雪かこい
十代さある天のてんつるあはれは

与或人支

冬まぬ雪やねする雪あはれ
雪やま又雪をえむけ師を
雪の菊や粉糖のわくる白のそい
雪をまゆはお結ふ雪糸の糸あ枕
一本ま雪勺は出せりぬ何

雪花やかさくしよさせるよめり君
山雪よ我もかもねん雪まこい
一本雪まこいと出せり雪糸か

辛湯秋雨

琵琶の湖面よ疎影り本公の律

藤よ病て羨ハ枯叶をくけ巡る

御風去新古今集「葉まらくむすハヤクこめむ
かくまう守ぢうもぬ世への羨のかすい終世を
死るまやうと

○愛よ一ツの不實あり元禄六年元山峯璞の
桃の実集「本為塚よ婦一て「本為

本為殿と背あをす新宝式 又云

あふれハけ句を空あやまりて境人翁の夕と
あもひて虚翁は海よて翁の他こく境布
せしものぢいむ

杜玉の不實をいふは誤り尋る

杉ふ——意の夢を空て

夏よりも...の...
 愚考杜玉は對して...
 根の人...
 菰を...
 愚考世...
 花の...
 言の口...
 好年や...
 愚考...
 海士の...
 ...

書肆

- 京都三條通升屋町 出雲寺文次郎
- 同 寺町通松原下ル 勝村治右衛門
- 大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
- 同 安堂寺町 秋田屋太右衛門
- 江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
- 同 本町通横山町壹丁目 出雲寺萬次郎
- 同 芝神明前 岡田屋嘉七

